

# 落日燃ゆ

## 映画文学人生論

城山三郎 (1927-2007)

『落日燃ゆ』 (1924) 「新潮社」

『大義の末』 (1959) 「五月書房」

『一步の距離 小説予科練』 (1968) 「文芸都市」

『男子の本懐』 (1980) 「新潮社」

骨は要りません

城山三郎『落日燃ゆ』は第三二代内閣総理大臣  
広田弘毅の伝記小説である。

「日本は英雄を要しない。われわれは、天皇の  
手足となってお手伝いをすればよいのだ」と、外  
相時代、よく部下にいていたという。そして、  
お手伝いをした結果、文官としてはただ一人、極  
東裁判の判決で絞首刑に処せられた。

この小説を読んだ読者の多くは、第二次世界大  
戦で日本の英雄を一人あげよといわれたら、それ  
は広田弘毅だと答えたくなるだろう。敗戦国には  
英雄はいないが、広田は往生際がよかった。日本  
人の庶民感覚によれば、裁判で弁明などせず、従  
容として死につく人こそ英雄の名にふさわしい。

明治十一年、福岡市の石屋の長男として生まれ  
た。名門の出身ではないが、一高、東大を卒業し  
て外交官となった。「外交官は自分の行ったこと  
で後の人に判断してもらおう。それについて弁解め  
いたことはしないものだ」という先輩の教訓を守  
り、「自ら計らわぬ」生き方に徹した。

総理大臣や外務大臣として協和外交を展開しよ  
うと努力したが、統帥権独立の仕組の下で軍部を  
抑えきれず、日中戦争の拡大を招いてしまう。そ  
のため、極東裁判では、共同謀議の罪や殺害防止  
の怠慢の罪に問われた。

読者は広田家の庶民的な夫婦愛と家族愛にも深  
い感動を覚える。静子夫人は夫の生への未練を少



## 落日燃ゆ

映画文学人生論

しでも軽くしておきたいと思い、自死した。夫はそれから後も家族へ送る手紙は静子宛とする。静子が生きているものとして語りかけた。「シズコどの」の文字が見られなくなったとき。つまり、広田が死ぬとき、はじめて静子も死ぬ。幽明境を異にすることを、広田はそうした形で拒んだ。

A級戦犯七人が処刑された翌日、火葬場の隅の共同骨捨場へすてられた七人の遺骨の一部はひそかに熱海へ運ばれ、伊豆山山麓にある興亜観音に隠された。それから七年後、厚生省引揚援護局は骨灰を七等分し、それぞれ白木の箱に納めて、各遺族に引き渡した。

だが、広田の遺族だけが、「骨は要りません」と、引き取りを断った。

昭和三十四年四月、興亜観音の境内に、吉田茂の筆になる「七士の碑」が建てられ、友人代表としての吉田茂や荒木貞夫元大将はじめ遺族やゆかりの人物約百人が集まり、建立式が行われた。だが、このときも、広田の遺族は、一人も姿を見せなかった。

昭和五十二年にA級戦犯は「昭和殉難者」（国家の犠牲者）として靖国神社に合祀された。これは祭司が遺族の同意なしで行ったことである。したがって、現職の総理大臣が靖国神社に参拝しても広田弘毅の冥福を祈ったことにはならない。

風車、風の吹くまで昼寝かな

広田弘毅